昭和三十九年十一月九日、両院議員総会に於いて自民党総裁に選任された直後の佐藤栄作首相の揮毫である。

自由民主党同志会新報

発行所
自由民主党同志会
発行人　福田晃丈
編集人　赤羽祐広
〒100-0014 東京都千代田区永田町 1-11-28
相互永田ビル８０１号
電話 03（5521）1755　FAX 03（3581）5300
毎月１日発行　購読料１ヵ年　12,000 円
三菱東京UFJ銀行　麹町支店　普通口座1111786

同志会組織の基盤が固まり今こそ本格的な発動のとき

活動宣言に則る強固な組織改革を提唱

「政局より国民生活を重視する」として、麻生内閣は国民生活重視の政策を次々と打ち出している。世界経済の急落をきっかけに、国内経済の不安が一層深まる中、国民の不安解消を第一に優先する自由民主党の施策であるが、同志会でも活動宣言に謳われるように党のバックアップを果すべく、組織改変の口火が切られた。すでに新生同志会では暫定的に人事が定められているが、このたび具体的な組織案の表明により、ほぼ執行体制が整うことになる。委員会や部会レベルでの活動をはじめ、執行体制が布かれることで同志会の動きはさらに弾みをつけることになりそうだ。

10月31日に参集された「七役会」では今後の執行体制へむけた提案がなされた

部会の新設から真の「政治の応援」をめざす

リーダーシップと柔軟な思考で新生同志会をリード

この春、新生同志会として船出をした自由民主党同志会だが、これまで会長のリーダーシップによって組織の改変が進められてきた経緯は毎号同紙でもお伝えしている。

さらにこのたび自由民主党同志会は、より強固な執行体制の確立へむけた案を具体化すべくその検討会が行なわれ、さる十月三十一日（金）、主なるメンバーによりその方針が話し合われた。

当日、会長より示された新組織案では、主要なる執行人事もあわせて候補者が指名され、今後の同志会が幅広く活動するための体制づくりの骨子を固めるべく新たな提案がなされたわけだ。この日集まったメンバーは、会の中核となる『自由民主党同志会七役』候補として会長より指名のあがった面々。

国際部・婦人部・文化部・全国組織戦略会議設置で柔軟な体制をめざす

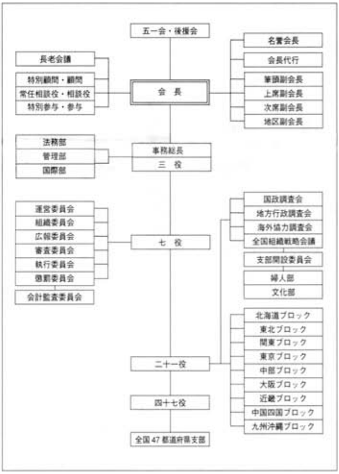
福田会長から、「今後の執行体制とその人事案については、各自が得意のジャンルで良い仕事をしていただくために考えたもので、ぜひ会のために力を尽くしてもらえればと思います」と述べられ、その場で新組織案が提示された。

さらなる拡大へ向け会費の値下げも

さて、今回の新執行体制で注目されるのは明確な役割分担がされていることだろう。会長を中心に、「三役」「七役」「二十一役」「四十七役」といった会のバックボーンとされるポジションに幅広い役割を持たせた部会・委員会セクションを配置している。旧委員会にくらべ倍以上に増設された部会・委員会は、より多くの会員メンバーに活躍してもらえることを考えると共に、より広く専門的な活動をはたしていく今後の同志会の方向も見据えた人事案となっている。調査会、国際部、婦人部、文化部といった今後の党の支援に大きく視野を広げた柔軟な体制づくりもこれまでの政治に大きな刺激をもたらすタイミングに適ったものといえよう。

さらには、自由民主党同志会をより身近に、新規入会会員数を増員させてさらなる拡大を図る具体案として会費の値下げ案も検討されている。

なお、正式な会の執行人事とともにこれら議案は11月23日に行なわれる臨時会員総会の承認を経て、即日発表されることが事務局より提示された。


五一会・後援会
長老会議
特別顧問・顧問
常任相談役・相談役
特別参与・参与
会　長
名誉会長
会長代行
筆頭副会長
上席副会長
次席副会長
地区副会長
法務部
管理部
国際部
事務総長
三　役
運営委員会
組織委員会
広報委員会
審査委員会
執行委員会
懲罰委員会
会計監査委員会
七　役
国政調査会
地方行政調査会
海外協力調査会
全国組織戦略会議
支部開設委員会
婦人部
文化部
二十一役
北海道ブロック
東北ブロック
関東ブロック
東京ブロック
中部ブロック
大阪ブロック
近畿ブロック
中国四国ブロック
九州沖縄ブロック
四十七役
全国47都道府県支部

特定非営利活動法人　健康開発事業団

健康は国力の源泉にして　雇用創生は国の原動力

ＮＰＯ法人健康開発事業団は、より健全な社会を築くため健康の啓蒙活動を展開する組織です。

活動スローガン
「病気にしない」―国の責任として
「病気にさせない」―医療の使命として
「病気にならない」―国民の意識として

〒100-0014　東京都千代田区永田町１－１１－２８

「国難」につながる

民主党政権になれば必ずや国の行方が危ぶまれる

経済優先の政治を推進する自民党に対しあくまで解散を迫る民主党。しかし、日本の緊急時に政治空白を生んでいいわけがあるまい。百年に一度とさえいわれる世界経済のゆがみに加え、来年は日本のおかれる外交課題もさらに難しい局面へと向かう懸念もある。こんな時期に、はたして民主党に国政を任せて日本は大丈夫なのか。

欺瞞だらけの小沢民主党

昨年8月8日、民主党の小沢一郎氏は民主党本部で米国のシーファー駐日大使と初めて会談した。

そこで小沢代表は、「アフガニスタンの戦争は、ブッシュ大統領が『米国の戦争だ』といって、国際社会の合意なしに米国独自で始めた。日本の直接の平和、安全と関係ない区域に米国や他の国と部隊を派遣して、共同の作戦をすることはできない」と、11月に期限切れのテロ対策特別措置法の延長に反対する考えを表明した。

シーファー駐日大使は、テロ特措法に基づくインド洋での自衛隊の給油活動について、「日本が参加することで、（石油の安定供給など）日本の安全保障などにも役立つ」と、小沢代表に理解を求めると、「米国を中心とした作戦は直接国連安保理で認められていないという認識だ。国際社会の合意を取る努力を最初にしなければならない」

と、テロ特措法延長には反対であることを伝えた。あくまで国連中心主義にこだわる小沢氏。一国の安全保障を国連という何ら実効性のない機関に委ねる危うさ。こんな民主党が外交政策を担えばその危険性は言わずもがなだろう。この政党は本気で日本の将来を考えているのだろうか。

現実味を帯びないマニフェスト

この日、押しかけた大勢の報道陣の前で、小沢代表は上機嫌だった。それもそのはずで、参議院選挙で負けたら責任を取る」と退路を断った選挙で大勝したのだから、自然に顔がほころんでくるのだろう。大らかな笑顔でシーファー大使と握手してみせた。

土台、あの参議院議員選挙での民主党の大勝は、民主党の政策に国民が共感したわけでなく、安倍自民党政権のマスコミなどの攻撃で不信を招いたものである。

民主党が前回の参議院議員選挙に向けて掲げたマニフェストは、〈政治とは生活である。国民の生活が第一〉をキャッチフレーズにして、家庭内の子どもに、一人月額二万六千円支給する「子ども手当」や、農家への「戸別所得保障制度」の創設などだった。

そして、これらに当てる財源は「天下り禁止」『特別会計』の削減などで15兆3千億円を捻出するというものだ。

また「天下り根絶法案」を提出することになっていたが、未だにこれも提出されていない。この「法案」とて『離職後5年間の禁止』というが、『顧問就任禁止』をも明確にしない以上、官僚が離職して『顧問報酬』を受け、5年を経たら『取締役』に就任できるのだから、文字通り骨抜き法案だ。

こんな「天下り根絶法案」のような財源を必要としていない『法案』でさえも、口先ばかりで提出されていないのである。

資金不足民主党の弱み

ある時、鳩山幹事長に対して小沢代表が「金を出してくれ」といったら、

鳩山幹事長が「小沢さんの不動産を売ってつくってくださいよ」と、切り返され、不穏な空気に包まれたという話がある。

たしかに、民主党結成期の資金は鳩山氏が出したが、それはほとんど返済されたといわれる。したがって、小沢代表がまた鳩山幹事長から資金を引き出そうとしたのだろうが、逆に鳩山幹事長に「不動産を手放したら」と開き直られたという経緯の話だ。

民主党は参議院議員選挙でこそ大勝しているが、衆議院では131議席で、自民党の306議席に遠く及ばない。したがって、一月一日以降に支給されることになっている政党助成金を当てにしていることから、早く総選挙を終わらせて、議員数を増やしてから政党助成金を受けたいという本音がある。

何しろ、議員一人あたり約7千万円相当だから、議員の増減は各政党（共産党を除く）のフトコロ具合に大きく影響する。

したがって、麻生総理が解散に踏み切れないというわけではないが、民主党とすれば、早期解散を切望するわけだ。いわば、解散が延びることが民主党を兵糧攻めにしているようなもの。

こんなことだから、民主党の小沢代表も鳩山幹事長も、国民の気持ちなど理解できるはずがない。

「小沢・鳩山」の間に存在する組織

さる『文藝春秋』（11月号）に〈小沢代表は命を賭して総理になる〉〈私は伝えた。総理をやって死んでいただきます〉こんなタイトルで小沢代表への思いを鳩山氏が記している。鳩山幹事長が何故ここまで小沢代表に恭順の意を示すのだろうか。

小沢代表が『変節漢』といわれるように、その足跡を少し追ってみたい。

まず、平成5年6月に羽田孜氏らと三十数名を引き連れて自民党を離れ、そして新生党を結成した。細川内閣では『闇将軍』と呼ばれ、自社連立で初の下野を味わう。平成7年12月に新進党党首に就任したが、これもじきに解党した。そして小沢シンパによる自由党を結成、同10年秋より、自民党と自由党の連立に転換、同12年4月に連立を離脱した。

この間に、側近中の側近だった中西啓介氏、熊谷弘氏と訣別。そして、扇千景氏、二階俊博氏、野田毅氏らが離れ、小沢自由党は25名と激減した。

このように調略の一途を辿る当時の小沢氏に手をさしのべたのが民主党の鳩山氏だった。この誘いを受けた小沢氏は「自由党は吸収されても結構だし、民主党の一兵卒になる」などと殊勝なこともいっておきながら「庇を借りて母屋を乗っ取った」といわれている。

こうして「母屋を乗っ取った」小沢代表だが、昨年11月2日、当時の福田総理と会談し『大連立構想』を提案したのは記憶に新しい。

7月29日の参議院議員選挙で大勝したものの「このままでは参議院選で国民に約束した政策が実現できない。次期衆議院議員選挙はきびしい」との観点から、大連立に踏み切ろうとしたのだろう。しかし、党内両院議員総会でも賛同を得られなかった。この独断専行に民主党内は大揺れとなった。

鳩山幹事長はこんな小沢代表を、この期に及んでもかばうどころか『文藝春秋』誌面で賞賛するのだから狂気の沙汰としか言いようがない。『売国奴』とさえいわれる小沢氏をどうして我が国の総理にしなければならないのか。

ここで話は飛ぶが「小沢、鳩山はフリーメイソンで結ばれている」という声をよく聞く。フリーメイソンの『教義』には「博愛的」「人道主義的」「進歩的」目的を追及することで、その規約には「自由、平等、博愛をモットーとし、全世界のメイソンを結合しつつある友愛のきずなを人類全体の上に押し広める任務を有し……」などとある。

つまり民主党のキャッチフレーズも「友愛」であるのだ。

「……場合によってはその生命を賭してもそのメイソン兄弟を援助し、指導し、保護し、之を不正より擁護しなければならない」とも規約には記されている。

人材不足に悩む民主党

民主党内には、小沢グループ（一新会・35名）、菅グループ（国のかたち研究会・25名）、鳩山グループ（政権交代を実現する会・30名）前原グループ（凌雲会・約20名）、野田グループ（花斉会・20名）、横路グループ（旧社会党系・約20名）、羽田グループ（約15名）、川端グループ（旧民社党系・約20名）というように、大まかに八つのグループがある。（図表参照）

緊急提言

政権交代は

　前代表の前原誠司氏の「まえはら誠司友人たちの会」代表は、人材派遣会社「パソナ」社長の南部靖之氏。昨年3月7日、省庁による天下り斡旋を全廃し、「パソナ」が人材バンクに選定されたが、この時点で元官房副長官の石原信雄氏を代表とする各省事務次官OBたちで構成する『助言組織』を結成した。民主党の大幹部である前原誠司氏でさえ、この体たらくだから、参議院の首脳みたいな横峯良部氏をも排除できないでいるのだろう。

　また、今度の衆院選で千葉二区から出馬する予定の黒田雄氏（県議）。あの『偽メール事件』の永田寿康元衆議院議員の選挙区である。この黒田氏はすでに民主党の公認を受けて、やる気満々で選挙区を活発に動きまわっているが、『福祉』を食いものにしている「補助金の水増請求」事件で話題になった人物だ。

　この黒田県議（48）が経営する「社会福祉法人 鳳雄会」（乳児院・児童擁護施設）や、医療法人の介護老人保健施設「ほうゆう苑」には闇に葬られたさまざまな隠ぺい工作があった。結局、内部告発されたわけだが、施設開設時からの職員は解雇や辞職で一年足らずでいなくなった。

　また、練馬九区では「三菱」の創立者・岩崎弥太郎の『やしゃご』を名乗る木内高胤（たかたね）氏が党の公認を受け、練馬区役所前に事務所を構えた。

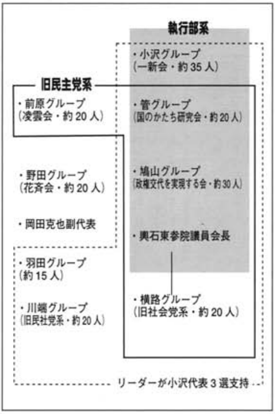
　この木内氏は、昭和41年生まれの42歳で、慶応大学経済学部卒業。「三菱銀行」ロンドン支店やドイツ証券、メリルリンチなどで『投資銀行家』の経験を積んだという。つまり、この人物も金融畑を歩んできているだけに、一般国民との感覚とは小沢・鳩山両氏同様かけ離れている。

「私は、マスコミと会わないようにしている。（代わりに）一人でも多く投票してくれる人に会っています。どんな人でも、自分を応援してくれる人なら素直に応援を受けます」。ところが、

「いつ練馬に住民票を移したのか」と尋ねると、

「それはプライバシーに関わりますから…」とコメントもなし。しかし、これから天下の公人になろうとする者にプライバシーとはどうだろうという我々庶民の疑問も理解しない『世間知らず』に、国民の苦しみが理解できるわけもないだろう。

民主党内グループ模様


執行部系
・小沢グループ（一新会・約35人）
旧民主党系
・前原グループ（凌雲会・約20人）
・菅グループ（国のかたち研究会・約20人）
・野田グループ（花斉会・約20人）
・鳩山グループ（政権交代を実現する会・約30人）
・岡田克也副代表
・輿石東参院議員会長
・羽田グループ（約15人）
・川端グループ（旧民社党系・約20人）
・横路グループ（旧社会党系・約20人）
リーダーが小沢代表3選支持

政界ジャーナル・アイ

民主党が官僚の無駄遣いを批判できるのか

　たしかに『特別会計』や『埋蔵金』など、表面に出ないカネがあり、これらのカネを心配しているのが官僚だ。しかし、このごろになって、民主党などがマニフェストにさまざまな「手当」を国民に支給する原資として、『特別会計』や『埋蔵金』の存在が話題になっているが、政治家に対する歳費や秘書の給与などは、まさに『ドロボー』といわれても仕方がない部分もある。

　昨年7月29日の参議院議員選挙に例をとってみるが、初当選組は7月30日と31日の2日しか在籍しないのに、7月1日に遡って一ヵ月分の歳費130万円と、登院もしていないのに通信費の100万円を受け取っている。当然のように3名の公設秘書給与が同じように1ヵ月分支払われているのだ。

　あの『さくらパパ』こと横峯良郎氏（民主党）などは、イギリスで横峯さくらが出場していたゴルフトーナメントでキャディをやっていたのに、7月分の『歳費』を受け取っているのだから呆れてしまう。

　筆者が、昨年7月29日の参議院議員選挙で当選した68名の新人議員を『ドロボー』といって憚らないのは、次のような実態があるからだ。

　7月29日に当選した議員は、8月3日に初めて登院し、ここで「当選証書」を受けている。なのに「7月1日に遡って27日分の『歳費』を全額受け取っている。おまけに、7月には議員会館に一度も入室していないのに、『通信費』として100万円を受け取っている。

　そして、『公設秘書給与』はといえば、当選日から20日以内に議員からの登録があれば支給されるという仕組みになっている。つまり、昨年7月29日に当選した議員の公設秘書は、8月17日までに『秘書』として議員から届け出があれば「7月1日に遡って給与が支給される。極端な話だが、公設秘書は1ヵ月で『ヤーメタ』ということになっても、2ヵ月分の給与を受け取れることもできる。

　そこで、7月12日が参議院議員選挙の公示だったわけだから、前議員は7月11日まで参議院議員の議席があった。これは引退議員や落選議員の『歳費』とその公設秘書の『給与』7月分も全額が支給されているということだ。これは国民の側から見れば、参議院議員選挙で当選した新人議員と、引退や落選した前議員公設秘書に対して平成19年7月分は二重に支給したことになり、正に『ドロボー』みたいなもの。

　参議院事務局では「私たちには日割計算という考え方はありません。これは議員運営委員会の先生方がお決めになったことなので、法律を変えない限り云々…」とのコメント。

　政治家がこうした杜撰なカネ、つまり国民の税金を無造作にポケットに入れておいて、官僚の無駄遣いばかりを批判できるのだろうか？

官僚ばかりを批判する前に、政治家の無駄遣いも糾せ！

2007年参議院選挙　民主党比例当選者一覧

氏　名	肩書き	氏　名	肩書き
相原　久美子	自治労役員	風間　直樹	（元）新潟県議
吉川　沙織	情報労連役員	轟木　利治	基幹労連役員
青木　愛	（元）衆院議員	大島　九州男	（元）直方市議
石井　一	（元）自治相	西岡　武夫	（元）文相
池口　修次	（元）財金委員長	今野　東	（元）衆院議員
ツルネン・マルテイ	（元）党国際局長	藤原　良信	（元）岩手県議長
神本　美恵子	（元）政調副会長	藤谷　光信	僧侶
横峯　良郎	ゴルフ校主宰	室井　邦彦	（元）衆院議員
藤原　正司	（元）党参院役員	大江　康弘	（元）党参院役員
川井　孝典	ゼンセン職員	山本　孝史	（元）財金委員長

2007年参議院議員選挙で躍進をはたした民主党。政治とカネでの攻撃も激しいが、はたして何人が自らの無駄遣いに気付いて頭の上のハエを追えたのか…

国政潮流

自由民主党　麻生内閣

―挑戦して取った「総理の座」にみなぎる自信

経済優先の政策に国民支持を集める

来年9月に任期を迎える衆院だけに、今年は解散選挙がいつ行なわれてもおかしくないと永田町関係者は誰もが考えていた。そこへ福田政権から麻生内閣の誕生とここへきて政局がめまぐるしく展開した。新たに登場した麻生内閣は、選挙の時期こそ政権存続のカギと解散を視野に国会運営を進めるため、自民と民主のせめぎあいは一段と激しくなってきた。

まずは9月29日、麻生総理が衆参両院本会議で総理就任後に初めて行なった初信表明演説から。

「私麻生太郎、このたび国権の最高機関による御名御璽をいただき、第92代内閣総理大臣に就任いたしました。私の前に58人の総理が列しておいでです。118年なんなんとする憲政の大河があります。新総理の任命を、憲法上の手続きに則って続けてきた統治の伝統があり、日本人の苦難と幸福、悲しみと喜び、あたかもあざなえる縄の如き、連綿たる集積があるのであります。その末端に連なる今この時、私は担わんとする責任の重さに、うたた厳粛たらざるを得ません。この言葉よ届けと念じます…」

かつて若くして家業を継ぎ、その後、日本青年商工会議所の会頭もこなした麻生氏が、財界から一転して政治家を志した時から、いつか自分も祖父・吉田茂元総理のように本会議の壇上ですべての国会議員を前に総理として所信を述べたいと強く思い、この一瞬を常に夢に描いてきたものが、まさに実現できた力強さが所信表明演説にあふれ出ている。

麻生総理の演説には、「総理の椅子」への責任感、ようやく就任したことへの信念、今こそ長年温めてきた自分流の政治を実現してみたいという意欲と意気込みがあふれている内容だった。

とはいえ、船出直後の麻生内閣は、国民の政権支持率が50％そこそこ、しかも組閣5日目にして早くも閣僚辞任が生じるなど、波乱含みでまさに順風満帆どころか暗雲漂う中での船出になった。

そこで、民主党はこの際、一気に衆院を解散総選挙に持ち込んで、民主党政権の樹立を、と目論んでいる。しかし、その本音に、この麻生総理のキャラクターが時間とともにじわじわと国民の中に浸透して、やがて支持率を押し上げていくのを危惧している気配はなさそうだ。

ところが実はそこにこの選挙の勝敗の分かれ目があるように思う。

それというのも、野党は麻生総理のこれまでの政治家としての軌跡をみて、この政治家は接触が深まれば深まるほど信頼感が増し、いつしか周辺に人を集めてしまうタイプの政治家だということを気づいていない。

例えば、麻生総理が最初に総裁選に挑戦して敗れた小泉内閣では、麻生氏は政調会長にはじまり、総務相、外相と主要ポストをこなした。二度目の安倍内閣では外相に再任、そして幹事長に就任。また福田内閣では、閣僚入りを打診されたがこれを断り、改革時にようやく幹事長に就任した。

こうした経歴で注目すべきは、麻生総理が総裁選挙に出馬するたびに、戦った相手に絶大な信頼感を持たれて要職に就いているという点だろう。政治家としての麻生総理の魅力は、小泉元総理のような外目にもわかる自由人としての華やかさや田中角栄元総理のような強烈な個性で一般大衆を魅了する即効性とは違うかもしれない。しかし、麻生総理の魅力は、接触すればするほど良さが理解できると、親しい人々はその人間性を強調する。そして、ついたニックネームが「周辺2メートル半の男」とか。

だから解散総選挙が長引けば長引くほど、国民の中に麻生総理のキャラクターは浸透するはずだし、内閣支持率はいずれアップするという見方ができる。

いま重要なことは
等身大の麻生総理を
知ってもらうこと

「実績」よりも「可能性」に賭けたアメリカの国民意識

不安の時代がより後押しした「変革！」

2008年11月6日、「米国に変革のときが到来した」と、颯爽と勝利宣言をしてアメリカ民主党のバラク・オバマ上院議員が次期大統領選での当選を決めた。来年の1月には米国建国以来初の黒人大統領が誕生する。

一方、麻生総理もこの結果を受けていち早く談話を発表している。

「オバマ次期大統領と力を合わせ、日米同盟を一層強化していきたい。国際経済の建て直し、テロ、地球環境といった国際社会全体の問題解決に向け力を尽くしていきたい」と、世界全体が抱える大きな課題の解消へむけ、国際協力の姿勢をあらためて示している。

奇しくも大統領選真っ只中の時期に、にわかに巻き起こった金融危機にともなう世界同時不況。これは現在進行形で多くの国々、多くの人々の不安を極限まで増大させている。まさに「変革」を旗印に、これまでの政治実績の有無も度外視して、弱冠47歳の大統領候補に寄せられた期待の大きさは、人々の不安指数の大きさに由来しているような現象でもあった。

そして、もうひとつ、今回の大統領選で目を引いたのがこれまで政治に無関心だった層が進んで投票に及んだというニュースだ。「変革の旗手」「融和の人」といわれる候補者に対して、移民層など非白人有権者の後押しは、選挙最終局面にきて絶大なパワーになった。女性、若者、非白人層といった、従来の選挙選ではどちらかといえば脇役の領域に案内されそうな層まで取り込み、幅広い層で過半数以上の支持を得たとされる。こうした、オバマ候補の選挙常識や慣習を変えた戦術は、まさに「変革の旗手」の片鱗をみせるものであったといえようか。こうした戦術、ぜひとも日本の選挙選でもこれから考えてはどうだろう。

これまで、対話とバランスをモットーにおいた政治を進めてきたとされるオバマ次期大統領だが、大統領という立場が変われば、これまでの政治手法がそのまま存続できることは難しいと考えるのが当然だ。はたせるかな日本の今後の外交政策、ぜひとも気を引き締めて望んでいただきたい。たとえ、いま批判を得ようとも、10年、50年、100年、500年、1000年後に大きく評価されるべき本物の国益を考えた政治をぜひ期待したいものだ。

日本の政治史探訪

ときの宰相を取り巻く時代

Vol. 1

日本国初めての宰相が誕生―伊藤博文

伊藤博文（国会図書館）

三条実美（国会図書館）

あまり史実に語られないが、大政奉還から王政復古までおよそ2ケ月という短い期間において、幕府が政府としての機能を果したことがある。この間、徳川慶喜が征夷大将軍として役職を務めた。そして同じ年の12月に王政復古の大号令が出される。まさにこのときが日本初、新政府誕生の時といえるかも知れない。ここにおいて、それまでの将軍職および摂関政のシステムが廃される。

これに変わり総裁、議定、参与の三職が設けられ、それぞれ任命された。このとき将軍と摂政の権限をひき継ぐ長が置かれる。

もっとも、この時の宰相は形式上だけのこともあり、その後、明治二年7月8日太政官制が成立すると、明治四年に太政大臣として内閣制度が発足する明治十四年までの間、実質的な最高責任者として天皇を輔弼する役職に就いたのが三条実美（1832年～1891没）である。三条は公家の名家清華家に生まれるも、安政六年、大老井伊直弼の弾圧を受けた父・実万の遺志を継ぐ形で尊王攘夷運動へと向かい、公家尊攘派の中心となる。明治元年1月、岩倉具視と共に副総裁に就任するも間もなく輔相に補せられ新政府の最高首脳の立場で江戸開城後の関東鎮撫に務めた。

明治政府は薩長中心の権力が集まった政府だったといわれるが、実質的に薩長中心の藩閥政府へと姿を変えていくのは、明治十八年以降、伊藤博文内閣の成立した後のこととなる。初代内閣総理大臣の誕生となったわけである。

伊藤博文（1841生～1909没）は維新後、岩倉具視や大久保利通とともに長州出身でありながら薩摩閥や公卿出身との関係を重視し広く信任を得た。しかし、明治十一年大久保利通が暗殺されると、岩倉具視による政治的主導権が強くなる一方で、憲法調査のために渡欧（岩倉使節団）。大日本帝国憲法の起草制定に中心的な働きをするなど、次第に指導者としての役割も重きものとなっていく。明治十八年、日本初の内閣制度が発足すると、伊藤博文は初代内閣総理大臣に就いたわけだが、十名の閣僚中、伊藤以下四名が長州、蔵相松方正義以下四名が薩摩、農商務相谷干城以下三名が土佐の出身という藩閥内閣だった。これは、後世まで薩長支配の政治象徴として語られている。しかし、内閣制度の発足は、近代立憲政治にとって、歴史上でも大きな評価を得るにいたるものだった。

参考：歴代総理の通信簿 八幡和郎（PHP新書）